

むかし、あるところに、母親とふたり娘の、三人暮らしがありました。上の娘はお雪、下の娘はお君といました。妹のお君は、今の母親の子どもでしたが、姉のお雪は前の母親の子どもでした。

ある年の正月のことです。雪がちらちら降っている寒い日でした。お君が、「母さん、いちごが食べたい」といじりました。外は、山も畑も雪が降っていて、いちごなんて、あるはずがありませんでした。けれども、母親がどんなにいきかせても、お君は、「いちごが食べたい」といって、聞きませんでした。とうとう母親は、お雪に、「そんじゃあ、お雪。おまえが行っていちごを取って来い」といいました。そして、単衣の薄い着物を着せて、かごを背負わせて、お雪を家の外へ追い出しました。

お雪はしかたなく、雪道をすべりすべりしながら、ようよう山を登って行きました。そして、そここの雪を、手で掘っては探し、手で掘っては探しましたが、どこもかしこも雪が深くて、いちごは見つかりませんでした。寒さは寒し、手はこごえるし、お雪は雪の中へしゃがみこんで、しくしく泣きだしました。

すると、そこへ、どこからか、白髪のおじいさんがやって来ていきました。

「これ、おまえはなぜ泣いている。どこへ行くんだ。いったいどういわけだか話してごらん」

お雪は、

「妹がいちごがほしいというので、探しに来たのです。でも、どこを探しても雪ばかりで、いちごがなくて困っています」といいました。

「そうか、それはかわいそうだなあ。それじゃあ、わしといっしょにおいで。わしのいちごをやるう」

おじいさんはそういって、先に立って歩きだしました。お雪は後からついて行きました。

おじいさんの家に着くと、そこには、一月から十二月までの十二人の息子が、いろいろを囲んで座っていました。おじいさんは、

「六月、六月」とよびました。すると、りっぱな若者が立ち上がって、

「お父さん、何のご用ですか」とききました。おじいさんは、

「この娘がいちごを欲しいといっているから、おまえ、ならせてやれ」といいました。

「はい、わかりました」

若者はそういって、外へ出て行きました。すると、たちまち、あたりがぼかぼかと暖かくなつて、庭の雪がみな融けてしまいました。そして、そこにもここにもいちごの花がさいて、やがて、おいしそうないちごの実がいっぱいになりました。お雪は、夢中になつて、かごにいっぱい、いちごをつみました。

それから、お雪は、おじいさんにお礼をいって、家に帰って行きました。

家では、お君が待ちかねていて、よるこんでいちごを食べました。そして、みんな食べってしまうと、「もっと食べたい」といじりました。母親は、お雪に、

「もう一度、いちごを取りに行っておいで」といつけました。お雪は、

「あのいちごは、山でおじいさんに会って、ようやくもらってきたんだから、また行ったとしても、とももらえらると思えない」といいました。母親は、

「いいかげんなことをいうんじゃないよ。おまえ、山にたくさんいちごを隠してるんだらう。いまにひとりで行って食べるつもりにちがいない」といいました。そして、

「いいさ。今度は、わたしとお君で行ってくる」といって、綿入れの暖かい着物を何枚も重ねて着ました。

「おかあさん、ほんとうに、よしたほうがいい。今頃山へ行っても、雪の中でごごえるばかりだから」と、お雪は止めました。けれども、母親もお君も、

「ばかをいうな。いちごをお腹いっぱい食ってくる」といって、かごを背負って出て行きました。

母親とお君は、山の中を歩いて行きました。けれども、どこをどう探しても、深い雪ばかりで、いちごはありません。しまいには、ふたりは雪の中でごごえて死んでしまいました。

やがて、お雪は、りっぱな若者と結婚して、幸せに暮らしたということです。おしまい。